

平成22年度研究成果報告書《学力の把握》

ふりがな 学校名	ふくろいしりつふくろいみなみしょうがっこう 袋井市立袋井南小学校
-------------	-------------------------------------

校長名：鈴木 一之

所在地：静岡県袋井市高尾740番地

電話番号：0538-42-2185

(1)学習指導要領に定める目標等の実現状況の把握に関する研究	
研究対象教科等	社会

《研究主題》

<p>生き生きと学ぶ子 ～子どもの変容や成長を見取り、言語活動を充実させる取組をとおして～</p>

【研究の要点】

<p><調査研究のねらい> ・子どもが社会的事象について思考・判断したことを、説明・論述・討論等の言語活動を通して表現されたことから適切に評価する。</p> <p><方策> ・「書くこと」「話すこと」を中心とした言語活動の充実 ・評価観点の焦点化、評価規準の明確化 ・授業リフレクションの充実</p> <p><成果(○)と課題(●)> ○授業で付けたい力が具体的になり、発問内容を吟味したり、資料を精選したりする等、一層の授業改善を図ることができた。 ○子ども一人ひとりの思考・判断の変容をつかむことができた。 ●単元全体における4観点の評価場面の位置付け ●効果的・効率的な評価の在り方 ●自分の考えを他者に分かりやすく伝える力が十分でない子どもの見取り方や支援方法</p>
--

I 研究指定校の概要

1 学校・地域の特色及び実態

本校では、学校教育目標を「かがやく子」と定め、その実現に取り組んでいる。児童の知的好奇心は高く、学習活動に意欲的である。

素直で明るく、人の話をしっかりと聞き、励まし合い協力し合って学習する姿が見られるが、自分の思いや考えを積極的に伝えることは得意ではない。また、「課題解決に必要な資料を選択し、その中から複数の情報を読み取り、それらに関連付けてまとめること」や「なぜそうなるのかを自分の言葉で説明すること」が苦手な児童が多い。そこで、地域

の学習素材を活用し、言語活動を充実させることにより、児童たちが生き生きと取り組む社会科学習を推進したいと考えた。

2 学校の概要 (平成22年4月5日現在)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援 学級	計
学級数	4	4	4	4	4	4	3	27
児童数	135	127	137	130	135	124	17	805

教員数 35名

II 研究の内容及び成果等

1 研究主題について

(1) 研究主題

<p>生き生きと学ぶ子 ～子どもの変容や成長を見取り、言語活動を充実させる取組をとおして～</p>

(2) 研究主題設定の理由と対象

○ [研究主題設定の理由]

本校では、自ら学び共に高め合う子を目指し、児童自らが学習課題の解決に向けて主体的に追究し、相互交流する中で互いの思いや考えを深め合うような学びの充実を図っていきなさいと考えた。

そこで、研究主題を「生き生きと学ぶ子」と設定した。「生き生きと学ぶ子」とは意欲をもち、主体的に学習に取り組む児童の総体である。児童はよりよい考えを求め、積極的に他者とかわることにより、思考がより深まり、学びの質も向上する。このような教育を推進することで、「自ら学び共に高め合う子」の具現化につながると考えた。

「自ら学び共に高め合う子」の具現化のためには、思考の場を生み出す言語活動の場を工夫し、考えたことを表現する力を育てることが必要である。そこで、思考の練り合いがされ、考えを深め合うような学習活動を、単元や授業構想の中に意図的に位置付け、言

語活動の場を効果的に取り入れた。併せて、児童の学びを見取り、常にその後の指導に生かすことを目指し、研究に取り組んできた。

○ [調査研究の対象]

学年, 内容, () 項目	具体の単元	評価の観点
<第3学年> (2)イ	地域の人々の生産や販売 「見直そうわたしたちのくらし」 「袋井市のメロンづくりを調べよう」	社会的な思考・判断
<第4学年> (3)ア・イ	健康なくらしとまちづくり 「ごみはどこへ」 「水はどこから」	社会的な思考・判断
<第5学年> (2)ア・イ・ウ	工業生産を支える人々 「自動車工場を訪ねて」 「世界とつながる自動車」 「工業の今と未来」	社会的な思考・判断
<第6学年> (1)キ・ク	我が国の歴史 新しい日本の国づくりを見つめよう 「新しい時代の幕開け」 「二つの戦争と日本・アジア」 戦争から平和への歩みを見直そう 「戦争と人々のくらし」 「平和な暮らしを目指して」	社会的な思考・判断

すべての学年において、「社会的な思考・判断」の観点を研究の中心とし、2学期の単元を調査研究の対象とした。特に第4学年は本研究指定の1～3年次、第3・5学年は本研究指定の2～3年次に向け、同じ内容の単元を継続して研究し、単元構想や評価方法等の改善を行った。

さらに、「社会的な思考・判断」の観点の評価について、作品やノート、ワークシートなどの記述内容からどのように児童たちの思考・判断の過程を評価したらよいかを研究してきた。

2 評価の具体例と考察及び指導の改善

これまで、思考・判断は、どのように評価したらよいか迷う場面があった。そこで、本校では、考えたり、判断したりしたことについて説明、論述、討論などをする言語活動を充実させ、評価するという方策をとった。つまり、児童が自らの内面を可視化するための「話すこと」「書くこと」を中心とした活動

を意図的に設定し、その表れを見取ることで評価につなげていくものである。そのために、問題解決的な学習の充実を図る中で、児童が根拠をもって自分の考えを話す・書く活動を重視し、説明や論述、討論などの言語活動を単元や授業構想の中に位置付けた。

(1) 各学年の実践

<第3学年の実践>

【地域の人々の生産や販売】

「袋井市のメロンづくりを調べよう」

①単元構成の工夫

本単元では、出荷額（約30億円）が日本一である袋井市の温室メロン栽培農家（およそ230戸）が生産し、袋井市の特産品にもなっている「クラウンメロン」を教材化した。その際、味や見た目は似ている他県産の「アンデスメロン」も取り上げた。それぞれのメロン農家は、美味しいメロンを生産するために工夫をしているが、小売価格には違いがある。クラウンメロンは、なぜ高価なのかを、児童たちに2種類のメロンを比較することを通して考える場面を設定した。

②評価規準の設定と評価方法

評価規準を「クラウンメロンの値段が高い理由を栽培方法や施設・設備などと関連付けて考え、説明している」とした。そして、ワークシートの記述内容をもとに評価し、次の両方の内容が書けていれば、「おおむね満足できる」状況(B)と判断した。

- ・栽培方法の比較から、栽培にかかる手間に着目し、そのことを根拠にして、値段が高い理由を説明している。
- ・施設・設備にかかる費用を根拠にして、値段が高い理由を説明している。

また、施設・設備と栽培方法にかかる手間を関連付けたり、ブランド化（贈答用など）に取り組む努力や出荷調整して質の高いメロ

ンを供給する（稀少性）を挙げたりしている記述内容がある場合、「十分満足できる」状況(A)と判断した。

③評価方法に関する考察

- 「おおむね満足できる」状況(B)と判断した児童の記述内容

ぼくが、クラウンメロンの方が高いと思ったのは、暖房に必要な重油です。重油はお金がかかっているし、クラウンメロンのたねはどこでも売っているわけではないので、買うのも大変だからです。

冬場、温室の気温を上げるために重油を使用しなければいけない。重油は農家が費用をかけて使用している分、その費用がメロンの値段に含まれていることに気付いている。

- 「十分満足できる」(A)状況と判断した児童の記述内容

クラウンメロンが高いのは、心をこめてそだてていて、重油にもお金がかかるし、クラウンメロン組合でしか種は売っていない。

このことから農家の人たちは、クラウンメロンのよさを信じているんじゃないかと思いました。それに、たくさんはとれない、その中からよいものをさらに選んでいる、つまり手に入りにくいからだだと思います。

「栽培方法と施設・施設の比較」、「手間」「費用」のキーワードを基に、自分なりの表現で書けているので、Aと判断した。

- 「努力を要する」状況(C)と判断した児童への指導・助言

栽培方法や施設・設備と価格との関連を説明できない児童には、他の児童の考えを参考にするよう助言し、実際にかかる費用や温度管理の有無など、子どもにとって分かりやすい事柄を提示するなどの支援を行った。

また、アンデスメロンとの比較はしているが、事実だけが書かれており、高価である理由を書いていない児童には、「黒板に書かれていることや貼ってある資料から理由を見つけてごらん」と助言した。

この單元では、教師が栽培方法や施設・設備の違いを比較表にして、資料として提示したり、ワークシートに思考の拠り所となる情報を示したことで児童が思考しやすくなり、その後のまとめの段階で、手間、費用、安心・信用の観点に分けて、どの児童も表現することができていた。また、評価方法を具体的にし、評価規準を明確にしたことで、学年内のどの教師も迷うことなく評価することができた。

<第4学年の実践>

【健康なくらしとまちづくり】

「ごみはどこへ」

①單元構成の工夫

最終処分場、粗大ごみ処理場、学区にあるペットボトルリサイクル工場と自分たちが出すごみを処理している施設を見学するように見学活動を組んだ。この見学活動により、教科書、副読本、資料集から得た知識が、見学したことにより自分のものとなり、理解が深まることとなった。このことは、自分なりの根拠を持って思考する学習に、効果的につながった。

②評価規準の設定と評価方法

評価規準を「体験や見学したことを基に、ごみ減量のために分別が必要な理由を考え、説明している」とした。

家庭、商店、工場などのごみ減量への工夫から、自分たちもごみを減らすための努力や協力が必要であることにまで気付くことができていた児童について、質的な深まりが見られたと捉え、「十分満足できる」状況(A)と判断した。

③評価方法に関する考察

- 「おおむね満足できる」状況(B)と判断した児童の記述内容

分別しないと、工場の人たちにめいわくがかかってしまいます。

理由①分別をしないと工場・当番の人にめいわくになってしまうからです。理由②ごみをもっていく場所がちがうから、ちゃんと分別しないとリサイクルしにくいからです。

この児童は、「手間」の面で記述しているが、見学をしたことや交流して自分の考えを深めたことを基に、理由を詳しく書くことができていることから、Bと判断した。

- 「十分満足できる」状況(A)と判断した児童の記述内容

分別すると、クリーンセンターへ行くごみがへります。行くごみがへれば、埋め立て地(最終処分場)も長く使えます。

分別をしないと、スプレーかんなどはばく発してしまうし、けいこう管は有どくガスが出てしまったりして、係の人も大変なことになってしまうからです。

リサイクルできるごみまでもやしてしまったり、かんきょうに悪いので、しっかり分別することが大切です。自分たちがほんの少し気をつけるだけで、こんなに違うのなら、しっかり協力しないといけないと思います。

分別の手間(迷惑)やエコの観点から意見をまとめ、自分たちの協力の必要性を考えて述べていることから、Aと判断した。

- 「努力を要する」状況(C)と判断した児童への指導や助言

ごみ減量の努力をしていることに気付いているが、その理由にまで考えが及ばない児童には、教師が一問一答式に個別質問して児童

の気付きを促し、分別がなぜ必要であるかを具体的に考えさせるようにした。

<第5学年の実践>

【工業生産を支える人々】

「自動車工場を訪ねて」から

①単元構成の工夫

本単元では、我が国の工業生産に従事している人々が、環境に配慮しながら、優れた製品を生産するために様々な工夫や努力をしていることを学習する。

静岡県西部地方は、自動車・オートバイ産業に関わる大きな会社があり、児童の保護者の中にもそれらの関連会社で働く方が多い。また、社会科見学で自動車工場を訪問し、実際に自動車がつくられていく様子を見学していて、工業生産についての学習で、機械工業(自動車づくり)を扱うことは児童にとって身近に感じられるのではないかと考えた。

これからの自動車づくりは、環境に配慮することが大切であることを踏まえ、10年後のハイブリッドカーの販売台数の変化を、グラフや既習の学習などから、根拠を持って予想する学習展開を考えた。そして、ハイブリッドカー、電気自動車、燃料電池電気自動車などの性能や利便性、排出ガス、価格などを比較することを通して自分の考えをまとめるようにした。

②評価規準の設定と評価方法

評価規準を「10年後の販売台数を学習したことを根拠にして予想している。」とした。

前時に調べたハイブリッドカー、電気自動車、燃料電池電気自動車の性能やその違いを根拠にして、今後の生産台数の推移を予想することができていれば、「おおむね満足できる」状況(B)と判断した。

また、それぞれの自動車の持つ長所や課題を両方とも踏まえて今後の推移を予想したり、環境について持続可能な社会を目指す視

点などで記述している児童については、「十分満足できる」状況（A）と判断した。

③評価方法に関する考察

- 「おおむね満足できる」状況（B）と判断した児童の記述内容

ぼくは、販売台数はかわらないに丸をつけただけ、ハイブリッドカーがだんだん安くなり、買う人が10年後にはもっと多くなっているし、環境問題もあるから、ハイブリッドカーを買う人が増えると思う。

価格に注目し、現在販売されているハイブリッドカーを例にして、これからは価格が下がっていくと考え、そのことを販売台数が増加する根拠としていることがうかがえる。

- 「十分満足できる」状況（A）と判断した児童の記述内容

ハイブリッドカーはちょっと排出ガスが出るけど安いし、CO₂が少なく、他の種類よりも便利だから、これからも販売台数が多くなっていると思う。これだけいろいろな開発をする技術があるのだから、これからも改良されると思う。

ハイブリッドカーは少し排出ガスを出しながらも、安価でCO₂が少ないというよさをとらえている。また、これまでの開発の歴史とそれを支えてきた技術に目を向けて未来を予想している。

- 「努力を要する」状況（C）と判断した児童への指導や助言

「ハイブリッドカーは環境にどのようになっているのか」という課題について、「環境にいい」

「性能がいい」という結論のみで、その理由や説明が足りない児童には、大事な言葉をキーワードとして、その理由を説明する習慣を付けていく必要がある。「なぜなら」「例えば」

などの言葉を使うよう習慣付けたい。

<第6学年の実践>

【我が国の歴史】

「2つの戦争と日本・アジア」から

① 単元構成の工夫

本単元では、「社会的な思考・判断」の評価場面を単元後半のまとめに位置付けた。江戸時代末期に結ばれた不平等条約を改正するまでの過程にある事実を多面的に捉え、個々の事実と関連付け、それらを総合して、条約改正がどのようにしてなされたのかを考えることで、より確かな歴史認識ができるのではないかと考えた。

そのため、単元を通して調べ学習の時間を充実させ、思考に必要な知識や資料の見方などの技能を十分習得できる活動を組み、それらの技能を活用し、「社会的な思考・判断」の評価の場面につなげた。

② 評価規準の設定と評価の方法

評価規準を「日本が諸外国から認められる国になったことを歴史的な事象を根拠にして考え、説明している」とし、「おおむね満足できる」状況（B）と判断する目安を「文化を取り入れた」「国力が充実した」の両方の内容が書けていることとした。

③ 評価方法に関する考察

- 「おおむね満足できる」状況（B）と判断した児童の記述内容

日本が不平等な条約を改正できた理由は、外国（西洋風）の文化を取り入れる行いをして取り入れ、西洋に近づいたからと、憲法を作ったり、戦争に勝ったりして外国に認められたからだと思う。

- 「十分満足できる」状況（A）と判断した児童の記述内容

日本が不平等条約を改正できた理由は2つあります。1つ目は、日本の近代化（西洋文化の取り入れ、大日本帝国憲法の発布）と国力充実による諸外国の評価があがったこと。2つ目はノルマントン号事件からの国民による後押しを受けた陸奥の最大限の努力だと思う。以上、2つの理由で条約改正が成功したと思う。

この児童は、不平等条約改正につながる事実を総括的に表しているためAと判断した。

(2) 効果的・効率的な評価の工夫

児童にどのような力を付けさせたいのかを基に、各観点の評価規準を明確にして単元の指導と評価の計画を構想した。基本的には、1単位時間ごとに指導のねらいを踏まえて評価の観点を絞り、焦点化して評価した。

特に「社会的な思考・判断」の観点については、学習問題を見いだしたり、社会的事象の特色や相互の関連、意味などについて広い視野から考えたりする場面を設定し、その場面で評価するように努めた。

(3) 授業改善へつなげる手だて

①授業リフレクションの工夫

教員の「児童の学習状況を見取る力」を高めていくために、授業リフレクションに力を入れてきた。事前協議会では単元構想や授業構想を授業者と参観者が共有し、「社会的な思考・判断」の観点の評価規準の具体的な状況例を共通理解した上で授業に臨み、観察対象児を複数の教師で見取ったりして、評価の「ずれ」を無くすよう努力をした。

②評価方法の工夫

思考・判断の過程も見取るために、下記の方法を取り入れた。

ア 学習活動の工夫

根拠に基づいた自分の考えを書く・話す活

動を重視した。特に「社会的な思考・判断」の評価を行う際には、個→交流（少人数）→全体交流→個（自分の考えをまとめる）とし、考えを共に深め合う交流活動の場を設定した。

イ 評価資料の工夫

付箋を用いて考えを分類・整理し、考えを深め合い、そのまとめを評価資料とした。

また、ノートやワークシートに記入する際、色分けした文字で他者の考えを区別して記入させるようにした。色分け以外にも、思考の流れを見取るためにワークシートを工夫した。

- ㊦ 「最初に」…最初の自分の考え
- ㊧ 「次に意見を交流して」…友達と交流しての考え
- ㊨ 「まとめると、わたしの意見は」…学習してきたことからまとめた自分の考え

③言語活動充実のための手だて

思考方法や意見のつなげ方、話形などを児童に提示した。

3 成果の普及と今後の展望

(1) 成果の普及について

公開授業研究会（平成22年10月22日）を実施し、授業公開（第3～6学年）後、授業リフレクションを行った。その際、リーフレットや指導案集、評価資料集を配布し、本研究のねらいや研究成果等を具体的に提案した。

(2) 今後の展望について

引き続き、問題解決的な単元構想を大切に、効果的・効率的な評価の在り方について更に研究を深めたい。また、自分が考えた内容を話したりレポートに書いたりするなどの力が十分でない児童への指導についても研究を深めていきたい。

平成22年度研究成果報告書〈学力の把握〉

ふりがな 学校名	ながおかきょうしりつちようほう じしょうがっこう 長岡京市立長法寺小学校
-------------	---

校長名：宮脇 好子

所在地：京都府長岡京市長法寺川原谷 31 番地

電話番号：075-951-0027

(1) 学習指導要領に定める目標等の実現状況の把握に関する研究	
研究対象教科等	社会

《研究主題》

考える力、表現する力をはぐくむ指導と評価
～郷土の歴史や自然環境、伝統文化に主体的にかかわろうとする児童の育成～

【研究の要点】

- 1 めあてに沿った単元計画を作成し、指導と評価の一体化を図る。
- 2 より具体的な評価規準を作成し、児童の学習の達成状況を正確に把握する。
- 3 評価材料となった児童の学習作成物等で交流・検討を行い、評価の蓄積を行う。

I 研究指定校の概要

1 学校・地域の特色及び実態

本校区は、長岡京市の西に位置し、西山に面している。里山の竹林や田畑などが広がり、筍や茄子、花菜などの特産も作られており、自然が豊かである。

また、古くは長岡京の都があった地でもある。光明寺、長岡天満宮、長法寺等、観光客でにぎわう寺社もあり、歴史や文化の香りに包まれた地域である。一方、近隣には商業地域や市立図書館、公民館、消防署等の公共施設があり、社会科を学ぶ上で、学習素材に事欠かない恵まれた地域である。

また、乙訓地方では最も早く、学制制定以前に創立された唯一の学校であり、地域や保護者は、本校に対する愛着と誇りをもち、非常に協力的である。

2 学校の概要（平成22年4月5日現在）

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援 学級	計
学級数	2	2	2	2	2	2	2	14
児童数	49	65	55	60	73	58	8	368

教員数 21名（1名）

II 研究の内容及び成果等

1 研究主題について

(1) 研究主題

考える力、表現する力をはぐくむ指導と評価
～郷土の歴史や自然環境、伝統文化に主体的にかかわろうとする児童の育成～

(2) 研究主題設定の理由と対象

○ [研究主題設定の理由]

生きる力の柱でもある、考える力や表現力を社会においてははぐくむための指導方法と評価方法について研究を行う。研究に当たっては、自然、歴史や文化に恵まれた地域の特性を生かして、地域の歴史や文化に対する理解と愛情を育て、継承しようとする児童の育成を目指したい。

○ [調査研究の対象]

評価の4観点のうち「社会的な思考・判断」の観点を調査研究の対象とした。文部科学省が実施した教師等を対象としたアンケート調査（平成22年）において、最も評価しづらいとの回答があった観点である。一方で、新学習指導要領において能力に関する目標に「考えたことを表現する力」を育てることが明示され、新たな課題となったからである。社会科の授業においては、単元等の学習過程の中で「社会的事象への関心・意欲・態度」「社会的な思考・判断」「観察・資料活用の技能・表現」「社会的事象についての知識・理解」のそれぞれの観점에서評価すべき学力を発揮する場面がある。しかし、毎時間全ての観点で

評価を行うことは実際的ではない。そこで、どのような授業を実施すれば、「社会的な思考・判断」の観点で評価ができる授業となるのか、授業づくりを通して研究した。

また、どんな学習活動を通してどのような評価規準で評価を行えば「妥当」であるといえるかについても探ることとした。評価方法としては、児童の表現活動（話す・書く）から見取ることとし、発言の記録やワークシート、ノートの記述を評価資料とすることにした。それは、指導者間での評価のズレをなくすためでもあり、「どのように」言い表し、書き表したのかについて、客観的に評価したいと考えたからである。

2 評価の具体例と考察及び指導の改善

(1) 第3学年「店ではたらく人々の仕事」

小単元の指導計画(全14時間)における「つかむ」過程で、「社会的な思考・判断」の評価場面を設定した。各家庭で買い物調べをした結果のグラフから、「なぜスーパーで買い物する人が多いのか」を話し合い、今後追究していきたい学習問題を立てる場面である。消費者の側に店に期待するものがあり、それを求めて買う行動をしていることに気付かせた後、「店側にも消費者に目を向けながら工夫をしているのではないか」という問題意識をもたせたいと考えた。

評価規準にもとづいて「おおむね満足できる」状況(B)を判断するめやすとして、「販売者の側にも願いがあり、工夫をしているのではないかと考え、それを追究する学習問題や予想、学習計画を考え表現している」とした。学習問題については、「お店はお客さんに選ばれるためにどんな工夫をしているのだろうか」「お店はお客さんの願いをかなえるためにどんな工夫をしているのだろうか」等を想定した。以下は実際の例である。

「おおむね満足できる」状況(B)と判断した子どもの記述例

- お店の人は、消費者の願いをどのようにかなえようとしているのだろうか。
- お店の人は、消費者の願いをかなえるためにどんなことに気を付けているのだろうか。
- お店の人は、どんな工夫をして消費者の願いをかなえようとしているのだろうか。
- お店の人は、お客さんのことを考えてはたらくしているのか。

その結果、「おおむね満足できる」状況(B)と判断できる児童が90%弱となった。「努力を要する」状況(C)と判断した児童は、11%(3人)となった。それらの児童には、他の児童の書いた内容を参考にさせたり、「お店の人たちは」という主語を使わせたりするなどして支援した。

家庭でのインタビュー結果と結び付けてスーパーに行く理由を考えたり、店側と客側を対比して考えたりする学習活動は、効果的であった。また、社会科に限らず、小単元の導入時に「学習問題づくり」を行い、児童自身が問題意識をもって学習を進めるスタイルで学習を組み立ててきたことは、児童の主体的な学習の推進に効果的であった。

(2) 第5学年「自動車工業のさかんな地域」

小単元の指導計画(全13時間)における「まとめる」過程で「思考・判断」の場面を設定した。まず、今年の自動車販売台数上位のグラフを示し、全てがエコカー(低排出ガス車)であり、現在は環境に配慮した車が売れていることを知らせた。その後、主な開発の歴史年表を提示し、これまでは安全や快適さを求めて開発されてきたことに気付かせた。そこから、本時の学習問題である「自動車会社はどんなことを考えて開発を進めているのか」について考えをまとめさせるようにした。

評価規準を「自動車会社は、環境のことだけでなく、安全や快適さも考えて開発を進めていることを考えている」として、「おおむ

ね満足できる」状況（B）と判断するめやすを、これまでの開発の歴史を踏まえて考えている状況とした。

結果は、「おおむね満足できる」状況（B）と判断できる児童が80%を超え、「努力を要する」状況（C）と判断した児童は13%（6人）となった。

今回、「つまり」という書き出しの言葉を示したが、そのことにより「まとめて考える」といったような思考を促すこととなった。

「言葉」は「思考」と密接につながっており、とても有効であったと感じている。

- 「おおむね満足できる」状況（B）と判断した例
 - ・自動車会社は、環境や人の命や便利さも合わせた自動車を作ることを考えて開発を進めている。
 - ・自動車会社は、安全や便利さや環境つまりエコや、お客さんを喜ばせることを考えて開発を進めている。
 - ・自動車会社は、環境や安全と便利さを大切にして、開発を進めている。
- 「十分満足できる」状況（A）と判断した例
 - 以下の子どもの記述は、広い視野から総合的なとらえ方ができている。このことを根拠にAと判断した。
 - ・自動車会社は、その時代による問題点を考えて開発を進めている。
 - ・自動車会社は、その時代に問題になったことを改善するため、それに加えて消費者が求めていることを考えて開発を進めている。
- 「努力を要する」状況（C）と判断した子どもへの助言
 - ・「どんな車を作ると売れるのかな」と消費者ニーズを思い起こすよう助言した。

(3) 授業づくりと評価の工夫

本校では、授業づくりをする上で、大切なポイントを3つに整理することができた。

ア 教材研究

内容構造図を作成してきたが、単元がどのような内容のつながりをもって構成されているのか、指導者がつかんでおくことが欠か

せないことが分かった。つながりを意識することで、1つ1つの内容について、どこまで確実におさえるべきなのかが明らかとなった。

イ 授業の流れ

「社会的な思考・判断」の1時間の流れとして、①適切な資料との出会いの場があること、②そこから気付きがあり、交流することで知識を習得する場があること、③その知識を活用して考えなければならない問いがあり、問いに対する答えを文章化する場があることが大切であるという結論に至った。

めあてに迫る学習のためには、どのような資料を準備すれば気付きが生まれ、知識を得ることとなるのか、ここは、社会科ならではの資料の重要性が発揮される場面である。本校では、資料作成にもかなりの時間をかけた。そのかいあって、資料に力があれば、児童は培ってきた資料活用の技能を存分に発揮して、指導者が予想する以上の読み取りをし、活発な意見交流ができるようになることを確かめることができた。

また、1時間の学習活動の中で、児童が「話す」「書く」といった表現活動をいくつか設定するが、どの問いに対してどう設定するとよいのか（書かずに発表させる、メモをさせて発表させる、時間を与えて書かせて発表させる）という点についても検討した。その際、多くの場合、時間を与えて書かせたものが、評価の対象となるが、どのような言葉で書きまとめさせることを「おおむね満足できる」状況（B）の「めやす」とするのか、指導者が吟味することが必要となる。さかのぼって、そのためにどのように問いかければよいのかを考えることとなる。評価時の児童の姿を具体的に描くことが、その時間の授業について細部まで検討することにつながるということが分かった。「評価」と「指導」の一体化といわれるが、評価について考えることが、まさに指導について考えることとなった。

ウ 評価規準の設定

まず小単元の指導と評価の計画作成の段階で、各時間において4つの観点のうちどの観点を中心に評価するか計画を立てる。その後、1時間の授業について、「社会的な思考・判断」の評価規準にもとづいて、ノートの記事内容で評価する場合、どのような記述内容であれば「おおむね満足できる」状況（B）と判断することができるかを考えた。その内容をもとにして、さらに質的な深まりや高まりのあるものを見いだすようにして「十分満足できる」状況（A）を判断することとした。

<評価事例> 3年「ものをつくる人々の仕事」 ●評価規準 自分たちの町で造られたビールは、製品の出荷を通して広く他地域と結びついていることを考えている。 （社会的な思考・判断）	
B	○造られたビールが長岡京市から他の地域に運ばれていることが分かる記述があるものをBと想定した。 ・京都府や長岡京市との位置関係でとらえている。（造られたビールは西日本に運ばれている。／日本の西側に／京都から見て～） ・複数の地域のまとまりでとらえている。（造られたビールは大阪や徳島などいろいろなところに運ばれている。／関西・近畿・四国など）
A	○上記の内容を踏まえた上で、さらに他の地域に住む人々の生活や輸送手段などが加えられている記述があったものをAと想定した。 ・運ばれた後のことが書かれている。（造られたビールは～に運ばれ、多くの人に飲まれている。／その地域の店で売られている。） ・運ぶ手段について書かれている。（造られたビールは高速道路を使いトラックで～に運ばれている。）
C	○造られたビールが長岡京市から他の地域に運ばれていることが分かる記述がないものをCと想定した。 ・運ばれた地域が分からない書き方をしている。（造られたビールは運ばれている。／いろんなところに運ばれている。）

児童の言葉で予想を立てる方法は、有効であった。ただし、Aの姿を事前に想定すると質的な深まりや高まりの姿を限定してしまうこととなり、難しさが伴う。また、Cについては、Bに至らない状況であり、あらかじめ想定する必要性がないように感じた。また、Cの児童に対しては、指導や助言を考えておくことの方が必要であることも感じた。

そこで、そうした課題を踏まえて、右上の図のようにBの姿を詳しく想定することとした。このことにより、児童の表現内容からAの姿を見いだしやすくなるとともに、Cの児

童への助言内容も明確になるからである。

<評価事例> 4年「地域の発展につくした人々」 ●評価規準 長岡京の発掘に尽くした中山修一の業績とそれらを広く知らせたい、後生に伝えたいという願いとを関連付けて考えている。（社会的な思考・判断）	
B	○伝えたいという中山修一の思いと継続していることに関わる記述がある。 ・たくさんの人に伝えなかったから発掘や発掘に関わることをやり続けた。 ・長岡京のことを知らない人にも教えていかなければならないと思ったので、発掘や本を書くことを続けた。 ・たくさんの人に伝えなかったから、発掘以外のこともたくさん行った。 ・本を書いたり、講演会したり、いろんな人に知ってもらいたかった。 ※「知らせたい」「伝えたい」等の言葉がある。

ノートの記述内容に盛り込んでほしいキーワードを想定することは有効であった。評価結果をABCで判断して記録に残す際、評価ポイントを明確にして評価することで表現力の巧みさではなく、表現内容に目を向けた評価ができたと考える。

3 成果の普及と今後の展望

3年間にわたり、授業を中心に研究を行ってきた。授業研究を通して、社会科における資料の役割、また社会科の中で求められる言語活動等について教師が理解を深めることができた。また、学習環境を整えることにも取り組んできた。今年度は、研究発表会を平成22年11月9日に実施し、研究授業（全学年）を公開した。その研究紀要や学習指導案を中心に情報発信して研究の成果の普及に努めたい。また、評価方法の工夫・改善について、実践的な調査研究を行ってきた。その中で、評価方法の工夫・改善が、指導方法の工夫・改善につながることを痛感した。

評価は各教科で改善が求められている課題である。平成23年度より全面実施の新学習指導要領を踏まえて、社会科の評価の観点が「社会的な思考・判断・表現」となったことは、「思考」と「表現」は密接につながっていることを実感できた本研究の成果と重なるものである。今後とも、児童の姿を具体的に描きつつ、評価と指導を結びつけて、実践を重ねていく必要がある。